

## 国字をめぐる文学者の構想

— ハングル・漢字・ローマ字

和田とも美

昨年、1998年の7月から韓国の紙・誌面を英語公用語化論が賑わせていたが、その余波は意外に長く続いている。この問題に積極的に参与したのは文学者たちである。

日本では今後こうした類の論議が起こることは恐らくありえないであろう。国語ばかりではなく、漢字かな混じり文という表記方式すら変更されることはないであろう。今やいかなる意味においても、ダイナミックな変化が起こる可能性、それが意見として提議される可能性すら無い日本語で思考している我々にとって、今回韓国で提出された英語公用論をめぐる文学者の態度を参照する事は、決して無益ではないものと思われる。それは、この問題が、日本語と同じように漢字ハングル混合文を使用していた朝鮮語において、漢字を除外し、ハングルのみを国字として通用させるようになった時の理論的対立の延長線上に置かれているからである。漢字かな混じり文を使用している日本語話者にとって、漢字を一切使わずに、かなのみで文章を読み書きすることは、ほとんど不可能なように思われる。漢字ハングル混合文による朝鮮語の文章は、日本語話者にとってある種の親近感を覚えさせるが、漢字を使用しなげらもすべてハングルという表音文字によって置き換えられている朝鮮語の文章は、あ

る種の驚愕の念を起させる。しかしこのような感覚は一時的な錯覚に過ぎない。我々日本語話者ですら、話したり聞いたりする際には全てを音声によって伝えるのであり、漢字という視覚作用に頼りはしないからだ。もちろん書かれた文章と話された文章を全く同一視するわけにはいかない。書き手が視覚作用がもたらす効果をあらかじめ予想して書く為に、かなのみによる伝達、いくら朝鮮語で行なわれているように文節ごとの分かち書きをしたとしても、が不可能化している、という言い方の方がより実情に近いように思われる。

日本の近代文学において、ひらがなのみで書かれた小説が、対象者を限定した場合を除いて、ほとんど考えられなかったことを考慮すれば、近代以降小説の分野においてはハングルのみで書かれることが当たりまえであった朝鮮語にとっては、漢字を表記法から脱落させることは、日本語の場合よりはるかに容易なことであったには違いない。しかしそれでもなお、1945年以降すべての文章から漢字を排除するために、数知れぬ論議と政策とが積み重ねられたのだ。現在では韓国においても朝鮮民主主義人民共和国においても漢字は国字ではない。しかし氏名は一般的にハングルで表記されるが、ほとんどの場合それに対応する漢字名をもっている。もちろん日本でかなによる名前があるように、韓国でも対応する漢字を定めない

名前があるが、姓は全て対応する漢字を有する（註1。公式書類においても署名する際にハンゲルと漢字を併記するよう求められることが多い。しかし氏名以外には、漢字は公用する表記としての扱いを受けない。特に文学の分野では、現在すべての文芸雑誌がハンゲルのみによる原稿の提出を求め、部分的に漢字を使用する際には括弧に入れてハンゲルと併記するよう規定している。単行本や新聞も同様である。作家の氏名についても、特に1980年代以降漢字によつて表記する場合はほとんど見られなくなった。このために日本語の文章で言及する際に、作家の氏名をカタカナで表記し、そこに漢字を併記しようとすると、それを探し出す為に思わぬ苦勞を強いられることがある。例えばある小説の次のような場面を参照しよう。

しかし発信者は、受信者であるわたしに訪れるであろう不信の念と混乱を十分に予測していたのか、宛て先を走り書きしながらも、二ヶ所に確実な装置をほどこしていた。その一つはわたしの国字の名前に続けて、括弧でくくつて漢字の名前を苦勞しながら記していることであり、二つめは、わたしの名前の前に、小説家という職業まで明記していることだ。こんな漢字の名前をもつた小説家などは、大韓民国にこれまでわたし一人だった（註2）。

以上の引用部分から読み取れるのは、この作家もまたハンゲルを「国字」と呼び、漢字と区別していることだ。これは「ハンゲル」と呼ぶことも可能な状況では、かなり意識的な表現である。またもう一つ読み取れるのは、一般的には、互いに知り合ひでなければ名前

を表記する漢字を知らない筈だ、ということである。ちなみに現在義務教育における漢字教育は九百字であつて、義務教育漢字二千字の日本に比べると約半分程度である。しかし教育は読みが中心で書き取りはほとんど行なわれないので、現在の三十代以下の層と七十代の層では漢字の知識において決定的な断絶がある。

漢文で表記されていた小説がハンゲルだけで書かれるようになってからの歴史は長い（註3。しかし政策として漢字が朝鮮語の国字から排除されたのは一九四五年以降のことだ（註4。その時キーワードになつたのは「民族主義」であつた。そして昨年の英語公用語化論をめぐる論議の核もまた民族主義である。

英語公用語化論をめぐる論議は、植民地解放直後の朝鮮における脱漢字化政策をめぐる論議に比べれば、ごく単純なものにすぎない。当時の脱漢字化政策をめぐる論争は、日本語で同様の場合を想定すれば類推されるであろうが、それこそ民族の知識水準の運命をかけたものだったのであつて、机上の空論に近い英語公用語化論は、その真剣さにおいて格段に弱い。しかし植民地を経験した韓国にとつては事が民族主義にまつわる限り、どんな見地に立つて発言しようとも、その評価が当の発言者に後々までついてまわる結果を招く。日本の天皇制と同じく踏み絵のようなものだ。したがつてどの発言も、各発言者の考え方の基本的な枠を露わにすることになる。

最初に英語公用語化を提議したのは小説家であり評論家であるト鉅一「ボク・コイル、Yoon」氏である。彼によると、韓国が現在直面している経済危機から再生し、さらに世界経済の中で上昇するためには英語を公用化する必要があるという。英語及び朝鮮語を共に公用語とすれば、朝鮮語を使用する人口は自然に激減し、やがて完全

に英語によって話し書き思考する民族に生まれ変わる。そうすれば韓国は世界経済に進出できる。この際使用人口のわずかな朝鮮語などにこだわるのは偏狭な民族主義にすぎない、というのだ(註5)。もちろんこのような論理はあまりにも単純で説得力に欠ける。しかしこの発言は、彼がこれまで示してきた民族主義嫌悪の延長線上にあるために、引き起こされた反応はそれほど単純ではなかった。英語公用語化論は、すぐさま「国際化主義」対「民族主義」という対立の図式にすりかわる。国史学者の民族主義的立場からの高飛車な批判や、ノーベル文学賞を韓国にもぜひ、という一部の文学者による無条件の擁護が飛び交い、アンケート調査などではだいたい賛否四六という様相を示した。賛成が四割にもなるのは日本においては意外と感じられるであろう。しかし街に溢れる失業者を横目に、ドルで稼ぐことの可能な者たちだけが経済危機以前よりもさらに豪奢に暮らしている現在の韓国において、英語さえできたらなんとかなったのに、という嘆きの前に、この提案は実によいタイミングで投げ出されたのであった。

日本と同様、韓国においても英語は、よりよい学校に入る為に、またより高い収入を得る為に不可欠なものとなっている。公用語化すれば、英語を解するということが現在のそのような特権をもたらすことではなくなるのであり、その点においては機会均等化されると言ってもよい。その点で、英語教育にかかる経費を国家が負担すべきだというト鉦一の主張は、必ずしも無視されるべきではない。もちろん入試科目やその他さまざまな試験は、英語だけではないが、しかし大きな比重を占めている。自らもまた、英語の点数が良かったこと

語化論を民族主義の名において非難するよりはましであろう。奇妙なことに、この論議の中で、現在の韓国で英語教育が小学校五年生から始められるという現状に言及したのはただ一人であった。コ・ジョンソク「40歳前後」は義務教育としての早期英語教育に触れ、やがて英語が名実共に公用語の位置を占めるようになるであろうと述べている(註6)。すでに英語が十歳から義務教育として教えられている以上、公用語化の流れは止められないのだ、という彼の論調は、もちろんあまりにも極端なものだ。韓国でも実際に英語が公用語化される可能性はほとんどない。しかしコ・ジョンソクの見解は、義務教育における外国語教育という問題を再考させるきっかけを与えてくれるものだ。日本でも中学から英語教育が始められ、義務教育の中に英語が含まれているという事態に、われわれはすでに慣れ親しみすぎている。義務教育において学ぶように定められている外国語が一種類に限られていて選択の余地が無い時、それは準公用語とでも呼ばれる位置を占めているといっても過言ではないであろう。語学としての英語はさておき、ローマ字が現代韓国語の中で占める比率は、日本の場合よりもはるかに高い。それは日本語のようにカタカナとひらがなの区分が無いからである。例えば「私のパソコンではメモリ不足でインターネットを使用できない」というような表現は、韓国語の場合「わたしのばそこんではめもりぶそくでいんたーねっとをしようできない」という具合に表記される。単一の文字によって表記される為に読み手にとってかなりの負担を強いられるように見える。従って特に英語からの外来語は、ハンゲルで表記されるよりも「わたしのP.C.ではmemory不足でinternetをしようできない」と一部をローマ字で表記する方が読み手にとって楽な場合

もある。特に英韓辞典では、英和辞典に見られるように語意の項で発音のみをカタカナで表記することは避けられ、英英辞典のように他の英語で説明する傾向にある。つまり韓国語におけるローマ字は、日本語におけるカタカナの役割をも引き受けている面がある。特に「パソコン」のような和製英語の侵入を避ける為に、personal computerは一時期単に「コンピューター」と言われていたが、最近では「P.C.（発音上はピーシー）」と表記されるようになった。

もちろんローマ字の問題は言語というより文字の領域であり、現代韓国語でいくらローマ字の比率が高いとしても、それがすなわち英語の普及率に繋がるものではない。しかし、恐らく英語公用語化論は、現代韓国語における、文字の問題を含めた英語の浸透状態の現状を正確に把握した上で反対されなければならないであろう。

反対側の発言の中で異色だったのは、国文学者であり評論家でもある崔元植「チェ・ウォンシク、1949」のものだ（註7）。彼は日本の明治時代を例に引き合いに出し、極端な国際化政策は極端な国粋主義につながると主張した。確かに明治時代に漢字かな廃止・ローマ字使用論が口論された後、日本は国粋主義の道へと進んだ。日本史の流れを韓国の現状分析に援用することの妥当性については判断を保留するとしても、この発言には彼が彼の世代に属していることを示す指標のようなものが含まれていることを見過ごしてはならないと思われる。このような見解から見てとれるものは、経済状態の資本主義化の段階にしたがって、韓国も日本とほぼ同じ軌跡を歩むしかないのだ、という絶望感である。韓国が必ずしも日本と同じ道を辿るとは限らない。しかし、どんな分野においても韓国社会が日本社会を数年の間隔をおいて踏襲しているにすぎない、というような見

方はいつまでも根強い。特に崔元植の世代には、それを運命として受け入れるしかない、という絶望感が共有されているようなところがある。このような発言は、その持つペシミスティックな響きによって、人々をはっとさせる力を持っている。しかし現在40歳以下の世代では、日本より西欧の方がはるかに身近な存在であって、韓国社会がアメリカ化することを予想しても、日本化するという予想図を描くことはない。先行する世代にのしかかっていた「日本化の運命」の切実な響きは、以後の世代に届くことはもうないのだ。崔元植の意見が強い影響力を発しえなかつたのは、この点に由来するものと思われる。

英語公用語化賛成の論者の中には、かつて現代韓国語の純化運動、すなわち日本語に由来する言葉の追放、が盛んに口論された時、それに強力で反対した人々が含まれている。日本の統治を受けて以来、朝鮮語の中には多くの日本語が朝鮮語のような顔をして居座っている。若い世代はそれが日本語に由来する事を知らない。政府の方針としては、これを教育して日本語に由来する言葉をできるだけ排除し「純粋な」朝鮮語を復活させようとする。「日帝の残骸を清算しよう」とは前金泳三政権の合言葉であり、その一環として旧朝鮮総督府が取り壊されたのは日本でもよく知られているが、「日本語式生活用語追放運動」もまた、同じ政策の一環であった。これに対抗して、朝鮮語に漢字、すなわち中国語を朝鮮語式に音読みする言葉がどれほど多いかを指摘し、言葉の民族的純粋性など幻想にすぎないと主張した人々が、現在英語公用語化論の軸になっている（註8）。

朝鮮における国語改革運動の大きな契機は、これまで5つである。1446年のハングル公布、1890年代末のハングルのみによる

新聞の発行、1945年のアメリカ軍主導による公式文書及び教科書における漢字使用廃止、1970年の韓国政府による漢字教育の廃止、そして1992年以降の日本語式生活用語追放運動。しかし論者の見るところでは、1890年代に行なわれたハンゲルのみによる表記運動と、1945年以降のそれとはその動機に決定的な違いがあることを見過ごしてはならない。1945年以降、国字から漢字を排除するという政策の決定的な動機は、何よりも日本語式の漢字熟語を排斥するところにあったのだ。

いくら語順が似ているとは言っても、朝鮮語と日本語は全く別の体系を持つ言語だ。にもかかわらず、植民地解放によって朝鮮語が国語として復権してからも、多くの日本語が朝鮮語の中に紛れ込んだままだ。前述のコ・ジョンソクが指摘しているように、一つの言語が漢字を共有していなかったとしたら、これほど多くの日本語の残骸が現代韓国語に見られることはなかったであろう。残っているのは主に名詞である。もともと朝鮮語の用言は、その構造上の特性によって、漢字で表記されるのに適してはいない。活用が第一音節に現れる場合が多いのだ。例えば日本語では「行く」「行った」は漢字で表記されても、おくりがなの違いによって時制を区別することができる。しかし朝鮮語の場合「간다」「갔다」というように、活用が第一音節で行なわれるために、仮にこれを日本語のように漢字及びおくりがなで表記すると「行ナ」「行ダ」となるので、視覚的に区別できなくなる。従って漢字で表記しても差し支えないものは、活用をしない体言や、用言のうち漢字として朝鮮語に入ってきたもの、例えば「実行する」であれば、「実行하다」と表記し、「する」に該当する部分で活用することができる、に限られている。

従って残存する日本語はほとんど漢字の熟語である。特に学術用語が日本語によって占められているのは、旧京城帝大などの教育機関の授業が全て日本語で行なわれていたことが大きな要因と言える。「哲学」「修辭学」「生物学」などの西欧の言葉から日本語に置き換えられた概念を示す漢字の熟語は、そのまま朝鮮語に入り込んだ。漢字表記がほとんど廃止された今、これらは「チョルハク」「スサハク」「センムルハク」という音読みのみがハンゲルによって表記されている。漢字使用廃止反対論者たちが恐れたのは、これらのもともと漢字で表記されていた言葉を、その音のみで表記した際に生じる意味の伝達不可能性であった。彼らは言う、「ハンゲルだけで書かれた西洋の翻訳書をどうやって読むのだ、漢字無しで書かれたフロイトを?」。もちろん日本語話者にとってはこのような叫びは十分に理解できるだろう。しかし現在の韓国ではそれが行なわれているのだ。

政府が1970年の漢字教育全廃に向かって準備を進める間に、1965年を前後して文学者の間に小説における漢字使用をめぐる激論が交わされた。その後現在に至るまで漢字使用は公の場では影を潜めているので、恐らく今後ともこれが国字としての漢字使用をめぐる最後の論争になるであろう。漢字使用の代表的な擁護者は、小説家張龍鶴「チャン・ヨンハク、1921」である。彼によると、漢字に由来する言葉、漢字語（漢字に由来する言葉、漢字の熟語）を使う限り、音のみをハンゲルで表記するのではなく漢字で表記しなければならぬ。漢字使用を全廃するのであれば、漢字語も使用されるべきではない。朝鮮語から漢字語を排除してしまえば、朝鮮語は表現力の限りなく貧弱な言葉になってしまうであろう。なぜなら朝

鮮民族の言語生活は漢字によって始められたのであり、ハンゲルはそれに比べてあまりにも遅れて創始されたものだ。中世の朝鮮の漢文による文学の伝統が失われてしまう。張龍鶴が漢字廃止に反対する理由は以上のようなものだ（註9）。

これに対し、漢字使用廃止を強力に擁護したのは、英文学者であり文芸評論家柳宗鍋「ユ・ジョンホ、1951」である。彼の独特はこの問題を民族主義を排除したところで擁護しようとしたところである。その代わり文章生活の合理化と大衆化を擁護の根拠とする。日本と同じように韓国でも、漢字は知識の指標になる。漢字をたくさん知っていれば博識だ、という考え方は根強い。アルファベットに慣れ親しんだ柳宗鍋にとって、それは実にアジア的な風習として受け取られたであろう。漢字を学ぶ為に費やす労力を他の学問を学ぶ為に活用しよう、と訴える。また、可能な限り全ての国民が文化を共有する前提を設ける為に、ハンゲルのみを国字とすることが必要だと言う（註10）。基本的には韓国の現状はこの路線を走っている。もともと小説はハンゲルで書かれていたのだし、哲学等その他の学術領域でも今やいったんはハンゲルで表記し、必要ならば括弧によって漢字を添えるようになった。

一方の張龍鶴の論調には、奇妙な点がある。彼が言語生活という時、それは完全に文章によるものに限定されている。朝鮮民族の言語生活は、口頭によって、漢字によって表記される以前から当然存在したのであって、まさか漢字によって表記されてから朝鮮語をしゃべりだしたわけではないのだ。このような態度は漢字使用廃止に対して、彼が冷静ではいらなかったことを示している。確かにひとたび漢字で思考することに慣れてしまったものにとって、漢字

を使わないでの文章の読み書きが不可能に思われることは確かだ。特に漢文の素養があるものにとっては、中世の漢文による朝鮮文学についての知識から徹底的に断絶されてしまうことは、恐怖以外の何ものでもなからう。張龍鶴は1921年生まれで柳宗鍋より14歳年長なので、これは世代的な問題であろうか。しかし詩人であり、文芸評論家である金起林「キム・ギリム、1908」は植民地解放直後という緊迫した状況においても、張龍鶴よりはるかに冷静な判断を示している。

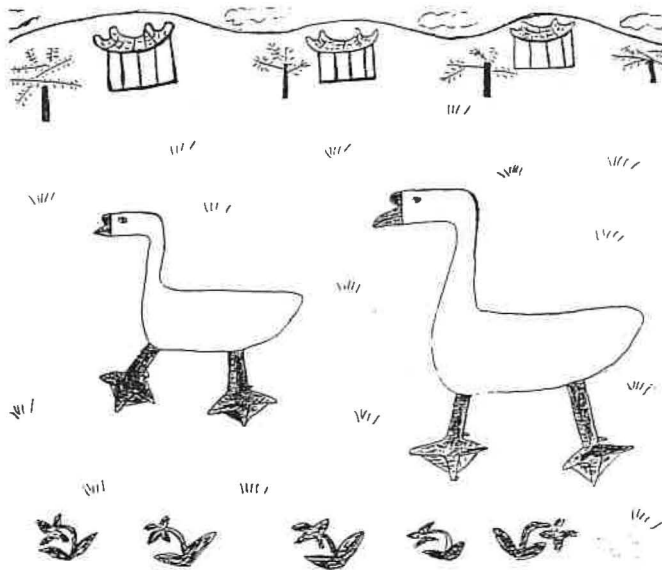
金起林はまず、漢字使用廃止の最も強力な動機が、日本式漢字熟語を朝鮮語から排斥するところにあることに注目し、日本式漢字熟語が朝鮮語に浸透する前の状態で、どれほどの漢字が使われていたかを調査する。彼は近代に入って登場した新小説を対象に調べた結果として、漢字の音読みによる漢字語が、ハンゲルのみで表記されている小説にふんだんに使われていることを指摘する。さらに、これらの漢字語は、主に中国語から流入したものであるが、今や日常の会話の中に溶け込んで元の漢字に拘束されないものだ、と金起林は分析する。次に、近代以降に広く普及した、朝鮮語に訳され、ハンゲルのみによって表記された新約聖書を取りあげ、そこに使われている漢字語が相当に難解であるにもかかわらず、聖書から聖書を読む信徒たちの会話の中に溶け込み、さらには信徒以外の人々の会話の中にも頻出することを指摘する。次に日本語の流入以前には見られなかった漢字語のうち、一般に口語で使われるものを選び出す（註11）。彼の基本的な立地点は、広く一般の会話の中に定着したものを「第一級」の言葉と考えるところにある。つまり日本語や中国語から流入してきた漢字語が、漢字で表記されて初めて意味が伝達

されるようでは朝鮮語として定着したとは言えず、そこから広く一般の会話の中に現れるようになったもの、つまり視覚的效果の無いところで伝達可能なものこそが、彼にとつての言葉である。

従つて彼にとつては、漢字を国字から排除することによつて発生すると恐れられたような、意味伝達が不可能になる事態などありえない。視覚的效果の無いところで伝わらない言葉は、音声によつて伝わるような言葉に置き換えられるべきであり、またハングルで表記し続ける限り、自然にそうなる筈なのだ。

多くの漢字使用廃止論者たちの論調は、ハングルが朝鮮の文化によつて作られたものであることを強調して民族主義の観点に立っている。しかし金起林から柳宗鍋へと受け継がれているのは、民族主義よりも大衆化の視点である。彼らは大衆化につきまとう啓蒙の目論見を注意深く避けつつ、一人でも多くの読者と文化を共有し、かつ一人でも多くの読者の共感を得られる表現の為に、ハングルの国字として推奨する。それは柳宗鍋が引用しているように、「上下貴賤すべてが読む為にハングルのみを使用」した『独立新聞』創刊（1896年4月7日付）の立場から受け継がれているものであり、「純粹でわれらの生の中に生きていられるわれらの言葉を整え、特異な概念を表現する（註12）」ための方法である。

もちろん日本では今やかな表記のみに固執することは、逆に多くの読者を失う結果を招くであろう。しかし漢字を使用していた言語が、表音文字で読み書きされるようになることも可能なのだ、ということを、朝鮮語においてハングルのみが国字として定着するまでの長い長い道程が示している。



(註)

註1、韓国人の名付けについては、三枝壽勝「韓国の名づけ」『言語』、1990年、3月号、222～225頁。

註2、金周榮「キム・ジユヨン、1939」、『고기잡이는 갈대를 깎지 않는다』、民音社、1988年、8～9頁。

註3、現存する最古のハングルによる小説は長い間『洪吉童伝』と言われてきたが、1997年になって発見された「薛公瓚伝」が推定年代1508～1511年で最古のハングル小説と言われるようになった。

註4、植民地解放以後、1945年12月より教科書における漢字使用廃止政策が採られたが、それは何よりも当時軍政を敷いていたアメリカ軍の政策によるものであった。以後言語学、文学、教育学を中心に各学会混ざりあつての激しい論争が繰返され、実質的には漢字併用状態が続いた。韓国政府によって完全に漢字教育が廃止されたのは1970年のことであったが、これまた各界の激しい反対によって二年で中断される。その結果現行の義務教育によって九百字の漢字教育を実施するところでおちついた。

註5、「국제어에 대한 성찰」『국제어 시대의 민족어』、文学과知性社、1998年、165～183頁。

註6、고종석「영어공용어화 논쟁에 관하여」『인물과 사상』第8卷、개마고원、1998年、217～229頁。

註7、「영어공용어화론은 서구패권주의의 연장」『朝鮮日報』1998年7月20日。

註8、例えば卜鉅一「우리 언어를 합리적으로 다듬는 길」、註5、127～135頁。

註9、「긴 眼目이라는 幽靈—우리 國語의 二元性」『세대』1996年8月、196～201頁。「나는 왜 小説에 漢字를 쓰는가」『凶形の伝説』의 作家張龍鶴씨와의 인터뷰』『세대』1963年9月、226～231頁など。その他漢字使用に言及する文章は多いが根拠が明確なものはい上の二つである。

註10、「한글만으로의 길 (1969年)」『現實主義想像力』、ナム文学撰33、1991年、91～141頁。

註11、「漢字語의 實像」『學風』、1949年10月。

註12、이규호「우리의 말과 우리의 삶」『創作과 批評』、1968年、冬号、692～696頁。